

新刊

□Lewis G., Schrire B., Mackinder B. and Lock M. (eds.): **Legumes of the World** XIV + 592 pp. 2005. £55.00 / \$100.65. 298 × 198 mm. Royal Botanic Gardens, Kew. ISBN: 1-900-34780-6.

本書はマメ科の属レベル以上の分類体系を集大成した最新の著作である。本書によると、マメ科は、ジャケツイバラ亜科4連171属、ネムノキ亜科4連78属、マメ亜科28連478属、計727属に分類され、また、これまでに記載された種は約19,325種である。

本書の編集は英国王立 Kew 植物園標本館のマメ科研究部門のスタッフ4名による。Kew でのマメ科の研究は、1800年代はじめ G. Bentham に始まり、その後、J. G. Baker, D. Oliver, J. Hutchinson, J. P. M. Brenan, B. Verdcourt, R. M. Polhill などが大きな業績を残し、本書の編集に関わった現在のスタッフである G. Lewis, B. Schrire 両博士へと受け継がれてきた。これまでの研究の蓄積により、標本館はタイプ標本約30,000点を含む約725,000点のマメ科標本を収蔵し、これらは本書に掲載されている全727属中726属をカバーしているという。そのような研究実績と、充実した標本・資料を誇る Kew 植物園は、現在、マメ科の分類学的研究において世界の中心的存在であり、そのリーダーシップが本書の出版に大きな役割を果たしている。

著者は、Kew のスタッフおよびその関係者が8名、Kew 以外の研究機関の研究者が16名である。アジアからは唯一、大橋広好先生が加わっている。マメ科3亜科全36連のうち15連は Kew のスタッフが、14連は Kew 以外の専門家が、残り7連については Kew と Kew 以外の専門家が共同で執筆している。大橋先生はヌスビトハギ連とミヤマトベラ連を執筆した。

本書は6つの章から構成されており、目次と各章の主な内容は以下のとおりである。

1. Introduction: マメ科の学名 (Leguminosae と Fabaceae) の問題、3つの亜科の区別点、近縁な科 (Polygalaceae) との比較、以前の分類体系 (Polhill, 1994) との比較、マメ科の経済的な価値などについて概説されている。

2. Complete synopsis of legume genera: 3亜科、36連、727属の分類体系が一覧にまとめられている。

3. Biogeography of the Leguminosae: 分子系統解析データおよび各連・属の分布データを用い、編集者の1人である B. Schrire 氏ら (2005) が行った cladistic vicariance analysis の結果と考察をまとめたものである。マメ科は、新生代第三紀初期にテーチス海沿岸に成立した半乾燥地性の Succulent-biome で起源し、その後の急速な分化・多様化とともに他の群系へ分布を拡大したと推定されている。解析方法の詳細については、Schrire et al. (Biol. Skr. 55: 375–422, 2005) を参照する必要がある。

4. Tribes and Genera of Leguminosae: 各連の概説、連内の属の分子系統樹に続き、帰属する各属についてシノニム、種数、分布域、属名の語源、習性、生態、文献、ノート (系統関係、見解の相違、問題の有無など)、利用法が記述されている。また、全727属のすべてについて、写真あるいは線画が掲載されている。

5. Bibliography: 文献一覧。De Candolle (1825) に始まり 2005 年までの、一部に in press も含む、約1500件の文献が整理されている。より詳しく内容が参照できる注目すべき文献は年号が太字で示されている。

6. Index: Illustrations, Vernacular names, Scientific names の3部構成。

本書の中心は、第4章で、属間の系統関係と、各属の特徴が簡潔に記述されている。文字データは紙面スペースの関係上、要点のみが簡潔に記述されているにすぎず、内容的には少し物足りなさを感じる。しかし、編集者の意図は、とにかく全ての属のイメージを漏らさず掲載することであり、写真、あるいは図版が紙面一杯にふんだんに掲載されている。しかも、写真も線画も、特徴がよく表現されており、たいへん質の高いものばかりである。収集にまつわる苦労話が前書き (About the book: pp. XII–XIV) に書かれているが、よくここまで収集したものだと感心させられる。大橋先生や邑田 仁氏の写真も含まれている。

おかげで、名前だけでこれまで実際に見たこともないたくさんの属の姿や特徴を、視覚的に確認することが可能になった。写真や線画をマメ科全体にわたって、セットで完璧にそろえた点は、これまでに全く類書がない。本書の大きな特徴である。

1978年7月に R. Polhill 博士が中心となって第1回国際マメ科植物会議が Kew で開催された。その当時のマメ科全体の分類学的見解は、Advances in Legume Systematics, Part 1 (Polhill & Raven eds., 1981) にまとめられ、これがその後約20年間のマメ科の分類学的研究の基礎となってきた。1981年以降は、Advances in Legume Systematics シリーズの Part 3 (1987)~Part 10 (2003) をはじめ、数多くの研究成果が出版・発表されてきた。この研究の流れは「20世紀後半におけるマメ科分類学の進展, Advances in Legume Systematics シリーズの紹介を含めて」として大橋先生によって本誌77: 1-8 (2002) に紹介されている。本書はそれらの成果にもとづいた分類体系の集大成であり、21世紀におけるマメ科研究の基礎になる大変重要な出版物である。

本書はマメ科の研究者にとって、分類学者に限らず、必携の出版物であるが、写真と線画でマメ科以外の研究者の方々にも十分楽しめるものと確信する。ひょっとすると、本書がきっかけで、マメ科に魅了される研究者の方がおられるかもしれない。世界中のマメ科の属がわかるので、ハーバリウムにもぜひ一冊常備してほしい出版物である。カラー写真が多い割に値段はだいぶ低めに押さえられており、コストパフォーマンスは悪くない。

私は、中身もさることながら、表紙あるいは裏表紙をめくると目に飛び込んでくる莢や種子の多彩なタペストリーが大変気に入っている。マメ科のもつ形の魅力がちりばめられている。これは編集者の一人 G. Lewis 氏が世界各地で入手した収集物をもとに、美しくかつ興味深く配列し、画家に描かせたものである。ここにも象徴されるように、隅々にも編集者のセンスを垣間見ることができる魅力ある美しい一冊である。(根本智行)

□加藤僖重：「野草」植物名総索引。第1巻～第70巻 128 pp. 2006. ¥3,000. A5 版。野外植物研究会。ISBN: no number.

80巻5号で紹介した「野草」総索引は、表題を著者別に並べたものだったのに対して、これは表題中に現れる植物名を拾って、和名の50音順に配列し、著者、年、巻号頁を示したものである。野草には新名、新産地の報告のほか、普通の本には載っていないタクソンの形態的特徴、奇形などの観察記録がたくさん出ている。私が同誌に「名前を考える」を書くきっかけになったクニタチカタバミについても、檜山氏がすでに記録しておられたことをあらためて知り、もっとしっかり読んでおけばよかったと思った。

前回にも記したが、加藤氏は表題や副題のみでなく、文中の「見出し」に相当する文字列まで拾っているの、自分の知りたいトピックについて検索するのは、これまでよりはるかに楽になった。こういう観点からすれば、植物名ばかりでなく、それがどんなトピックの下に書かれているかも表示されていれば、さらに便利だと思うが、これは醵を得て蜀を望むというたぐいだろう。謄写版刷りの野草の利用価値を、更に高めるものである。

残るは採集・観察記に現れる植物名で、過去の産状を知る上で重要だが、これは本文中の植物名を拾えば済むというわけには行かない。というのは、Aを得て「Bとの違いは」とか「B, C, Dはなかった」というような記述が少なくないから、一々取捨選択せねばならないのである。私も過去に試みたことがあるが、あまりの面倒くささに挫折した。ともあれ、加藤氏のご苦勞に対し、絶大な敬意を表する。つけ加えれば、この仕事は二件とも、加藤氏の私費による産物である。野外植物研究会の連絡先は次のとおり。〒180-

武蔵野市 (金井弘夫)